

災害時における SNS 情報を活用した プログラマブルな QoS 制御システムの実装と評価

理学専攻・情報科学コース 柳田 晴香

1 はじめに

東日本大震災時、電話やインターネットが使えない事態が生じたことから、大規模災害時には、従来のネットワーク機器監視による制御だけではなく新たな情報を利用した制御が期待されている。我々は、多くの人間の目や口コミによるネットワーク障害に対する集合知が災害の状況把握に有益であるという仮説に基づいて、SNS 情報に基づいたネットワーク制御システムを提案している [1]。

従来のネットワーク制御システムには、制御プレーンをプログラム可能とする SDN(Software Defined Networking) による柔軟な集中制御が期待されているが、現在の SDN では依然として、ヘッダ情報に基づく経路制御など従来と同様な制御の効率化に限定される。そこで我々は、データプレーン処理とその API(Southbound Interface) をプログラム可能とする SDN を拡張する DPN (Deeply Programmable Network) の概念を適用し、より高度で柔軟な制御を実現する。災害時においては、ネットワークリソースの不足が予測され、情報伝達のためのアプリケーションの優先制限などアプリケーション毎の QoS 制御が効果的だと判断できる。DPN を実現する FLARE[2] では、この様な制御もプログラマブルに実装可能である。

本稿では、この FLARE スイッチを用いて、SNS 情報を活用した、アプリケーションの種類に基づくプログラマブルな QoS 制御システムを実装し、本提案システムが災害時に有効であることを示す。

2 提案システム

本研究で提案するシステムの動作は以下の通りである。

- (1) アプリケーションの識別
ユーザ端末で、プロセステーブルの参照によりアプリを識別し、アプリケーションの名前をトレーラとして SYN パケットの後ろに付加する。FLARE スイッチが、この SYN パケットをコントローラに渡すと、コントローラでトレーラを読み込み、アプリケーションの識別を行う。
- (2) Twitter による障害検知
文献 [1] に従って、コントローラでリアルタイムにツイートの解析を行い、障害ツイート数と障害が発生した地名を取得。取得した地名とスイッチを対応させる。
- (3) リンクのコスト値の更新
スイッチ間のリンクのコスト値を、初期値を 1 とし、障害ツイート中に対応させた地名を含むツイートが 20 件以上あったら + 1 と更新する。コスト値の更新は 60 秒間隔で行う。
- (4) 最適経路探索
ダイクストラ法を用いて、スタートからゴールへコスト値最小の経路をリストで出力。
- (5) 経路の再設定
決定された経路に、REST-API でフローエントリをスイッチ側に設定する。
- (6) アプリケーション毎の QoS 制御
メールや電話などの情報伝達のアプリケーションには帯域を確保し、逆に帯域を沢山取ってしまう、YouTube などの娯楽目的の動画視聴のアプリケーションには制約をかける、アプリケーション毎の QoS 制御を行う。

3 FLARE 実機実験

3.1 実験環境

本研究では、図 1 に示す物理構成で実機実験を行う。1G は 1Gbps、10G は 10Gbps のネットワーク接続を示す。コントローラ

ラから、4 台の FLARE スイッチを制御し、様々な制御モデルを検討する。また、h4 はプロキシサーバ、h6 はウェブサーバとして利用する。

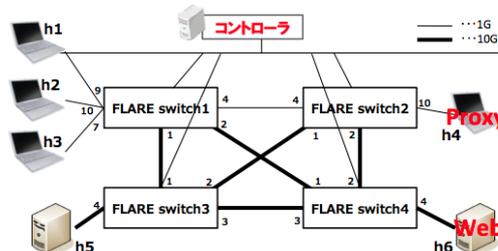


図 1: FLARE 物理構成

3.2 比較実験

本実験では、東日本大震災時の 2011 年 3 月 11 日 14 時から 15 時の実際のツイートを用いる。図 2 のように FLARE スイッチを 1 から順に、岩手、東京、京都、福岡の地域名に対応づけ、岩手付近の h1, h2, h3 が、東京付近の h4 のプロキシサーバを通して通信する。h1 は Skype のトラフィック、h2, h3 は YouTube を想定したファイルダウンロードのトラフィックを流す。前提として、障害検知後は Skype を優先し、YouTube は迂回経路を通す。実験は、提案システムなしの場合と提案システムあり(図 2)の場合と比較して行う。提案システムなしの場合、障害の前後でも Skype と YouTube は同一経路を流れる。

提案システムありの場合、まず Skype と YouTube のアプリケーションの識別が行われる。また、全てのリンク間のコスト値はデフォルトで 1 なので、コスト値最小の Route1 の経路がデフォルトで設定される。コスト値の更新が 60 秒間隔で行われ、Twitter の解析システムより岩手東京間で障害に関するツイートが 20 件以上検知されたことによって、2 回目の 120 秒後の更新の際に岩手と東京間のコスト値が + 1 更新される。その後も 60 秒間隔で岩手東京間で障害が検知され続けたことにより、コスト値が + 1 され続ける。3 回目の 180 秒後の更新の時点で、岩手と東京間のコスト値が 3 になるため、コスト値最小の 2 である京都を通る Route2 の経路が選択される。ダイクストラ法によってこの Route2 の迂回経路が選択されると、経路を設定する REST-API が呼び出される。これにより、フローエントリがスイッチ側に投げられて、YouTube のトラフィックにおいて、Route2 の迂回経路が再設定される。本実験により、災害時に Twitter 情報に基づいて、障害地区を迂回する経路切り替えを確認できる。

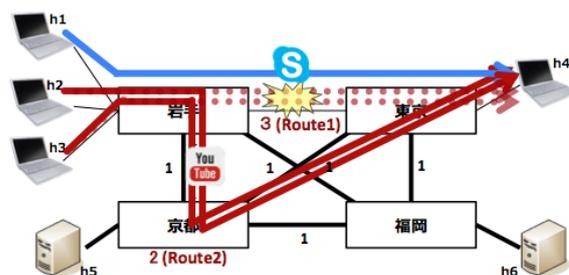


図 2: 提案システムありの場合のトラフィックの流れ

また、提案システムありの場合で、アプリケーション毎に帯域を設定する場合、Skype と YouTube のアプリケーションの識別が行われ、Skype は災害検知後に最低でも 800 Mbps の帯域確保、

YouTube には最大でも 100 Mbps までの帯域制限が行われる．次に結果を示す．

3.3 性能評価

3.3.1 スループット測定

3.2 節の実験における，スループットの測定結果を示す．図 3 が提案システムなしの場合，図 4 が提案システムによる経路制御をする場合，図 5 がさらにアプリケーション毎の QoS 制限をする場合である．

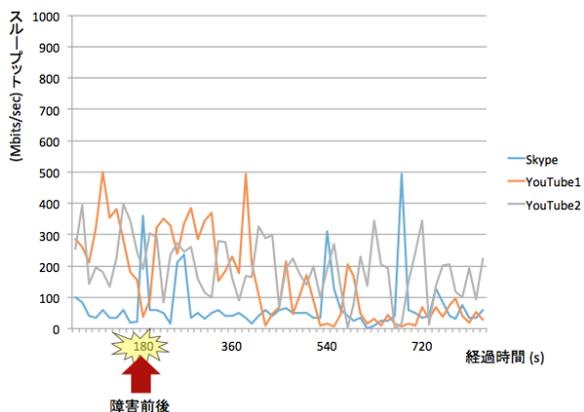


図 3: 提案システムなしの場合のスループット値

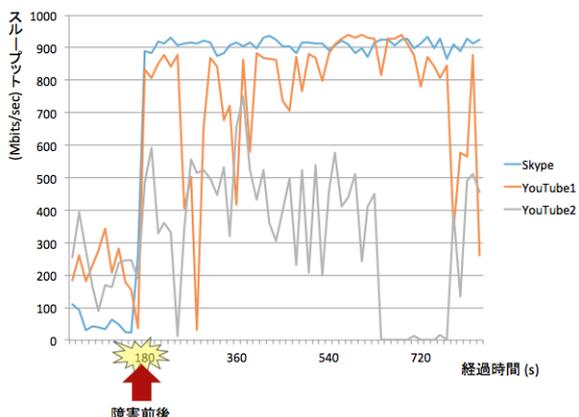


図 4: 提案システムあり（経路制御時）のスループット値

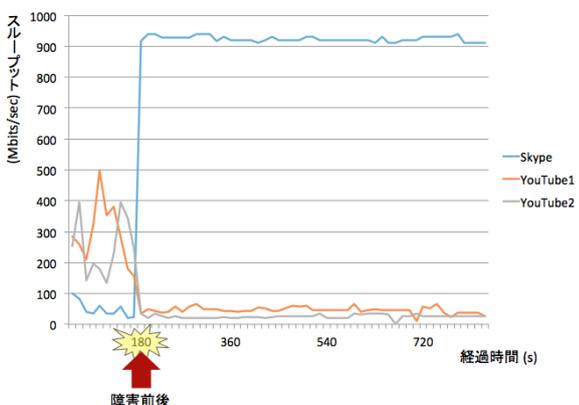


図 5: 提案システムあり（アプリケーション毎の帯域制御時）のスループット値

図より，提案システムなし（図 3）に比べて，提案システムあり（図 4，図 5）の場合，障害検知の後に Skype のスループット値が上がっていることが分かる．図 5 においては，Skype のトラフィックは 800 Mbps の帯域保証が行われ，YouTube のトラフィックは

100 Mbps 以下にシェーピングされるような，特定のアプリケーションに対するきめ細やかな制御が見て取れる．よって，本提案システムによって災害時における情報伝達のためのアプリケーションの優先制御とアプリケーション毎の QoS 制御が達成されたと判断できる．また，図 4 において，迂回経路を通した YouTube についてもスループット値の向上が見られることから，本提案システムによりネットワーク全体のスループット値の向上にも成功したと言える．

3.3.2 遅延時間の測定

次に，提案システムの経路切替にかかる時間を把握するため，Ping を 1ms 秒毎に 1 つ飛ばし遅延時間を測定する．結果を図 6 に示す．経路切替時に 20-30ms 程度の遅延が発生しているのは，コントローラにフローエントリを問い合わせるためである．

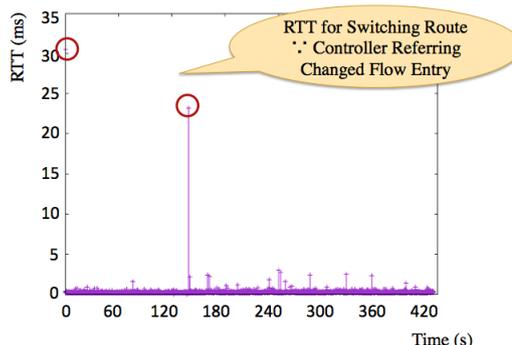


図 6: 経路切替時の往復遅延時間（RTT）

4 まとめと今後の課題

SNS 情報から障害検知を行う，災害時に最適なアプリケーション毎の QoS 制御システムの提案を行った．提案システムを実装することで，情報伝達のためのアプリケーション以外のトラフィックを迂回経路に通す経路制御と，アプリケーション毎に帯域を設定するアプリケーション毎の QoS 制御を達成した．

提案システムの評価としては，RTT を 20-30 ms 程度に抑えつつ特定の情報伝達のアプリケーションのスループット値を約 800 Mbps 上げることに成功したことから，災害時において本提案システムが有効であることを示した．

今後の課題としては，より詳細な提案手法の評価として，更に複雑なトポロジでの実証実験の評価を行いたい．また，提案手法の精度を上げるために，Twitter による障害検知に加えて，トラフィックモニタによる機器監視による障害地点の特定を行うことや，最適経路探索にダイクストラ法よりも精度の高い手法を適用すること，アプリケーションの分類方法としてスライシングを行うことなどが挙げられる．今後の後輩たちの活躍に期待する．

謝辞

本研究は一部，総務省戦略的情報通信研究開発推進事業（SCOPE）先進的通信アプリケーション開発推進型研究開発および科学技術振興機構戦略的創造研究推進事業（CREST）によるものである．

参考文献

- [1] Chihiro Maru, Miki Enoki, Akihiro Nakao, Shu Yamamoto, Saneyasu Yamaguchi, and Masato Oguchi: "Development of Failure Detection System for Network Control using Collective Intelligence of Social Networking Service in Large-Scale Disaster" In Proc. the 27th ACM Conference on Hypertext and Social Media (HT2016), pp.267-272, Halifax, Canada, July 2016.
- [2] Akihiro Nakao, "FLARE: Open Deeply Programmable Network Node Architecture," Stanford Univ. Networking Seminar, October 2012. http://netseminar.stanford.edu/10_18_12.html